

英語の完了形の仕組みと副詞句

樋口 万里子

1. はじめに

本稿は、特に時間副詞句との整合性を巡る現象を中心に据え、英語の完了形の意味や仕組みについて明確化を試みるものである。例えば次の(1) - (3)の様な例が非文となる理由については、これ迄も問題とされ様々に議論されてきたが、いずれにせよ未だ疑問が残る。

(1) *Chris has left York *yesterday*.

(2) *He has been dead.

(3) *He has broken his leg for *2 months*.

それは、これまで完了形のメカニズムが正しく捉られていなかった為である様に思われる。本稿では、認知文法の枠組みを用い、完了形の意味機能や時制との関わりにおける位置づけを理論的に論じつつ、これらを中心とするいくつかの問題の包括的解決に取り組む。

例えば(1)に関し、Klein (1992) は、(4)における Chris's leaving York という事態は紛れもなく過去に起きているにも関わらず、その時点を特定化することが何故できないのかという疑問を提起する¹⁾。

1) これは、ドイツ語やデンマーク語では、英語の完了形に類似の意味を持つ形式が、特定の過去を示す副詞と共に共起できるため、その様な言語サイドから発想するとどうしても湧いてくる疑問と言えるかもしれない。

(ia) Ich have den Brief gestern um zehn abgeschickt.

[I have the letter yesterday at ten sent off.]

(ib) *I have sent off the letter yesterday at ten.

(4) Chris has left York.

しかも、(5) - (7) が自然な文であることから解る様に、現在完了形には、過去を示す副詞が共起できないという訳ではない。

(5) I've given up that idea *long ago*.

(6) He has worked *on Sunday*.

(7) I have gone back to visit *two months ago, last weekend, and just yesterday*.

(1)と(5) - (7)との違いは、過去分詞 (以下 p.p.) の表す事態の生起時が、(1)では特定のな一時点であるのに対し、(5) - (7)では漠然としていたり時間的の広がりを感じられたりするという点にある。この様に、文の容認性が意味の捉え方に依存するところから、Klein はこの問題を統語論的には処理できないものの一つと捉え、彼なりの解決策を提案する²⁾。しかし、残念ながら、英語の完了形の意味が時制との関係において正しく捉えられていない為にそこにも問題があり、抜本的解決には至っていない。

一方、Langacker (1991 : 211 - 225) は、英語の文法体系全体からの位置づけを試み、完了形を「過去分詞で表される過去に起きた出来事とつながりを持つ、参照点迄の継続の状態を表す」とする。しかし、彼の関心は専ら have の

(ia) Jeg har sovet godt i nat. (Danish)

(iib) *I have slept well last night.

しかし、意味や形式の類似性が高くても、それぞれの言語では特有の歴史を辿り、それぞれ別のイメージが対応していると考えられる。例えば、ドイツ語では (ia) の様な形式が特に口語では過去の出来事を表す中心的な形式となっている。また、英語でも過去完了形の場合はドイツ語のイメージをある程度残しているのかもしれない。

2) 完了形についての Langacker (1991) 以前の殆どの文献は、現象記述に終始している。McCoard (1978) は、多くの事例を扱ってはいるが、基本的に Current Relevance 等それまで挙げられてきた概念では完了形を包括的には説明できず、完了形の様々な問題はその時々の意味によるものだという言い方をし、結論として語用論の問題だと言うだけで終わっており、意味のメカニズムに迄は踏み込んでいない。Klein (1992) は、ここに語用論的制約という形あるものを示そうとした1つの試みであると言える。

意味の方に重点があり、完了形そのものについては概略的で、上記の様な具体例の処理については未知数の部分が大きく、Klein の疑問にも直接的には対処できない。何故 (2), (3) や (8a,b) の様な文が排除され、(8c) が自然なのかについてや、(9)が「住んだことがある」という意味には取れるが、「今迄継続的に住んでいる」とは解釈できない理由等も Langacker の記述からは判然とはしない。

(8a) **For (these) two years, he has been dead.*

(8b) **Recently, Chris has arrived.* Cf. Chris has *recently* arrived.

(8c) He has been dead *for 2 years.*

(9) He has lived here.

本稿は、2章で Klein 案の概観とその問題点の指摘を行い、3章で代案を提案する。完了形の意味構造における have の機能については、Langacker (1991) をほぼ継承するが、過去分詞の意味については新たな機能を追加し、完了形の複合構造、have + p.p. に、時制との関係を踏まえた新たな案を示す。更に4章で具体例に当たりながら、完了形の意味と副詞の整合性のメカニズムを論じ、Langacker 案と本稿案の違いを確認しつつ本稿案を敷衍する。

2. What Klein (1992) Calls a Puzzle and His Solution

現在完了形の p.p. の表す事態そのものは、これを眺めている視点より遡った時点で生じたものと認識されている。それは、Klein が言っている様に、(10) がごく自然な文であることから明らかであろう。

(10) Chris has been in Pontefract --- *yesterday*, in fact.

過去形と現在完了形の違いは、川瀬 (1999) も述べる様に、過去形は当該の出来事を「過去の生起時点のみにおいて」描くのに対し、現在完了形は「それを過去から現在迄の時間の広がりの中にあるものとし、現在という参照点から眺

めて」描いている点にあると言える³⁾。だが、それだけで p.p. の事態の生起時の特定化を阻まなければならない決定的な要因になり得るとは考えにくい。また、現在完了形の意味として、現在とのつながり (Current Relevance) という要素も度々指摘されるが、昨日や2、3分前に生じた出来事であれば、現在との結びつきが強い場合もあり得、現在完了形と共に起しても良さそうに思われる。しかし (11) は明らかに非文であり、事態生起時点が特定の認識されている場合には、時間副詞ではなくても (12) の様に非文である。

(11) *Chris has left NY {*yesterday/2 min. ago*}.

(12) *I have learned that *at school*.

Cf. I have learned that lesson well.

先行研究における考察の利用では決め手が見つからないとして、Klein は (13) の様な制約を立てる。

(13) P-DEFINITENESS CONSTRAINT

In an utterance, the expression of TT and the expression of TSit cannot both be independently position-definite.

(Klein : 1992 : 546 (43))

(13) の TT (Topic Time) とは、the time span to which the claim made on a given occasion is constrained と説明されており、主動詞 have の時制の指す時点を指す。また、TSit (Time of Situation) は、the time of whatever is described in the nonfinite part of the utterance であり、完了形においては p.p. の表す事態の生起時位置を指す。つまりこの制約は、have の時制の指す時点と p.p. の事態の生じた時点が別々でかつ特定のあつてはならないと

3) 参照点 (reference point) とは、ある対象物にアクセスする際、そこに直接行くのではなく、一旦認知環境の中で目立つ別のものを経て、そこを手がかりに目標物に到達する認知パターンにおける手がかりの地点である。

いうものである。Klein は次の (14a,b)及び (15 a c) の容認可能性は、この制約で説明可能だとしている。

(14a) *At seven, Chris had left at six. (TT は at 7、TSit は at 6)

(14b) *Chris has left at six. (TT は発話時、TSit は at 6)

(15a) At seven, Chris had left. (TT の指定のみで TSit の指定はない)

(15b) Chris has been in Ponterfract. (同上)

(15c) *Yesterday*, Mary came to Chris's office *at six*. But Chris had left *at six*. (TT は at 6、TSit の指定はない)

即ち (14a) は、have の時制が指す時間である TT が 7 時で TSit が 6 時、また (14b) は現在時制なので TT は発話時で TSit が 6 時と、それぞれ別の時間点を指定しており、制約に違反しているから非文だとされている。一方 (15a,b,c) では、いずれも TT の指定のみで TSit の指定がないので違反はない、という論法となっている。

単文は一つの事態を表す訳だから、その一つの事態に異なる 2 つの時間位置を指定する副詞があってはならないのは当然である。その意味では、この制約自体は健全なものと言える。しかし、完了形の振る舞いを左右する原理としては、この制約には欠陥がある。Klein は、現在時制は現在時点を指定するが、過去時制は特にある時点を指定しないと言うのだが、その根拠ははっきりしない。残念なことにもこの点に関する Klein 自身の説明はないが、Harder (1996 : 415 : 11 - 12) がこれを支持し、過去時は聴者によって確認されるまでは position-definite ではないと述べている。しかし、通常、過去時制の表現が理解されるには、不特定のな場合や想定のな場合を含め、事態の生起時について話者と聴者の間で確認できなければならない。従って、法助動詞を含まない時制文の場合、Klein の言い方をすれば TT は常に position-definite の筈である。過去完了形の場合でも had の含む過去時制は、或る過去の時点を受け手に

identify する様に指示する働きを持つ。それ故、had の指す過去の時点を確認できないのに過去完了を用いたりすると、(16a,b) の様におかしなことになるのである。

(16a) *I had had breakfast and went out.

(16b) *They had lived in Singapore *for six years*.

(「6年間 Singapore に住んでいた」の意で)

従って、Klein の立てる制約では (17) が自然な文であることを説明できない。

(17) *Yesterday*, Mary came to Chris's office *at seven*. But Chris had left *at six*.

(17) の第2文では、下線部の had の時点に関しては文内の副詞による特定化はなされていないが、時制の指示機能と文脈から *at 7 yesterday*, *leave* の時点が *at 6* という理解が十分可能である。従って、条件は (14b) と同じ筈である。しかも Klein 自身も、(17) の had の指す時点は7時で6時は Chris's *leaving* の時点だと言っており、(17) は彼の制約には違反していることになる。従って (13) は成立しないと言える。

やはり、完了形の仕組みや意味をきちんと正面から正しく捉えなければ、彼の疑問に対しても根本的解決とはならないし、より広い完了形現象も説明しきれない様に思われる。3章では、完了形の仕組みについて本稿案を立てた上で、この問題の解決に着手したい。

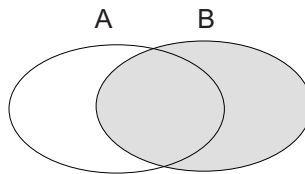
3. 英語の完了形の仕組み：2つのタイプ

本稿案に入る前に、その前提となる完了形と時制の関係を先ず整理しておきたい。ここでは、英語における時制を表す形は現在 (zero 形) と過去 (過去を表す形態素) の二つとし、現在完了形は現在形の一つであり、主動詞の *have* に表れた形態素が時制を担うと考える。例えば *He has had lunch* を時

制と SOA 部分とに分けてみると、has に表れている現在時制と、SOA 部分の [He-have had lunch] となる。時制は、完了形の SOA (have + p.p. + で構成される概念意味内容) を、参照点のある時点に当てはめて考える様指示する機能を持つ。つまり、He has had lunch という文は、この SOA が現在成り立っていることを表している。

この上で、本稿では英語の完了形の SOA、即ち have + p.p. + という形式で構成される概念意味内容自体には [A : 参照点以前には生じているが生起時は意識されない p.p. の事態に特徴付けられる状態] と、[B : いわゆる大過去の、参照点時の状態とつながりを持つ、参照点より前の事象の生起] の二つの意味を立てる。本稿の提案とは、現在完了以外の形にはこの二つが混在しているが、現在完了形には A の意だけしかないというものである。A と B は図 1 のベン図の様な関係にあり、左側半月形空白部分が現在完了形の領域であり、A B が重なった交わり部分を含む右側楕円の斜線部全体が、現在完了以外の完了形の領域という具合である。

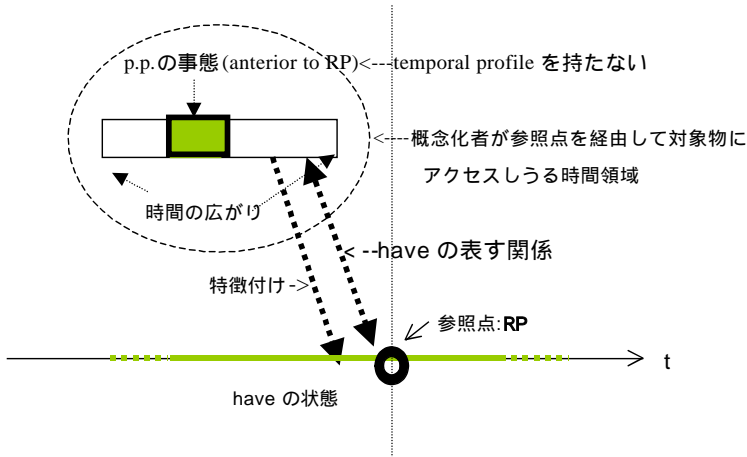
図 1



A の意味イメージは図 2 の様に図示できるかもしれない。参照点より遡ったある時間の広がり が帯で表され、その間に生起した p.p. の事態が灰色の部分である。下向きの破線矢印は、それが have の表す状態を特徴付けていることを表し、双方向の破線矢印は have の持つ、参照点と p.p. の事態を含む時間の広がりとの関係を表している。時間の広がりにおける p.p. の事態生起とそれ

により特徴付けられた状態が存在すること迄が [have + p.p.] の意味内容であり、SOA 部分である。

図2 完了形Aタイプ



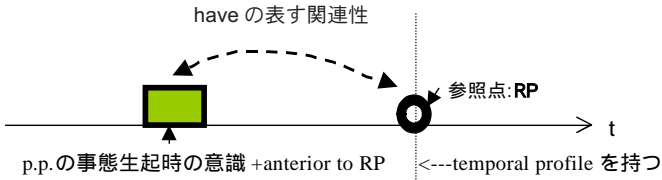
さて、現在完了形の現在時制は、この意味内容 SOA（灰色部分）を、現在という点において当てはめる様に指示する。従って、現在完了形の文は、p.p.の事態生起に特徴付けられた状態が参照点である太線丸で表された現在時点において成り立っている事を表す。即ち本稿では、灰色部分と太線の丸い点と二つの矢印部分が現在完了形の profile だと考えている。

一般的に完了・結果・継続・経験等という現在完了形の4つの用法と呼ばれているものは、動詞の意味や文脈によりこの profile のある側面に焦点が当たったものということが出来る。即ち「完了」は p.p. の事態の終わりに焦点を当て、「継続」は p.p. の事態が帯の様に継続している側面、「結果」は p.p. の事態に特徴付けられた状態部分、「経験」は参照点である現在において p.p. の事態とその影響としての現在の状態を眺めている側面である。

一方、現在完了以外の完了形（過去完了や時制を持たない不定詞や動名詞形

や法助動詞に連なる形等) は、次の様な B タイプと先程の A タイプの両方が多くの場合重なり合っており、また A の場合もあれば B の場合もあると考えられる。

図3 完了形 Bタイプ



する情報が背景化され捨象されており、B の p.p. では前面にあり意識されることである。A の p.p. は have の表す状態をその生起によって特徴付ける働きは持つが、p.p. の事態が何時生じたかは意味に含まない。A の profile が時間軸において持つ位置 (temporal profile) は、参照点時点のみである。B の場合の p.p. の事態は時間の流れにおいて参照点から遡る時点で生起したイメージであり、生起時も意識され profile される。A タイプでは生起時の特定化ができず、B タイプでは前述の (17) の様に可能なのは、この故だというのが本稿の主張ということになる。

例えば (18a) が容認されないのは、[left York] の部分が、参照点時点、即ち現在の状態を特徴付ける意味機能に徹しており、出来事が参照点以前に生じていること以外に、生起時に関する情報を持たないからである。つまり、yesterday が修飾し得るものが、文の profile 中に存在しないのである。

(18a = 1) *Chris has left York *yesterday*.

(18b = 4) Chris has left York.

(18c) Chris left York.

(18b) は leaving York という事態の生起によって特徴付けられた状態の存在

が、現在時点において確認できることを意味する。即ち、これが一般に言われている Current Relevance の正体であろう。これに対し、(18c) では、leave という事態生起時を時制が確認しろと指示し、temporal profile も leave の生起時点となる。発話される文は、基本的に全てその談話において relevant であり、その意味では過去形の場合でも関連性はある筈だが、過去形の場合、事態の影響が現存するかどうかは、表現では保証されていないのである。

この様に考えれば、現在完了形でも (19a c) として再度挙げる次の様な場合では、何故過去時を意味する副詞と共に起できるのかも説明し得る。

(19a = 5) I've given up that idea *long ago*.

(19b = 6) He has worked *on Sunday*.

(19c = 7) I have gone back to visit *two months ago, last weekend, and just yesterday*.

それは、とりもなおさず、これらの副詞が修飾しているのは、事態の生起時ではなく、背景にあるの時間の広がりにおける p.p. の事態の有り様だからである。

(19a) では、いつ起きたというよりは、漠然とずっと昔に起きたという距離感が描かれ、(19b) では、特定の日というより、日曜という曜日に働いたことがあるという意味であり、(19c) では出来事がある期間の間何回か起きたことに重点がある。いずれにおいても、副詞の役割は have の状態の特徴付けのあり方を修飾するところにある。(19a c) と (19a' c') とを比較してみても、(19a' c') では生起時での事態そのものに焦点が当たっているのに対し、(19a c) では、参照点である現在の状況に焦点が当たっており、p.p. の事態は現在の状況の特徴付ける背景であり、時間の広がりの中の模様の様なものである。

(19a') I gave up that idea *long ago*.

(19b') He worked *on Sunday*.

(19c') I went back to visit *two months ago, last weekend, and just*

yesterday.

次の (20a,b), (21a,b) のペアではその違いがより顕著に現れる。

(20a) Have you decided about it?

(20b) Did you decide about it?

(21a) Have you heard the bell?

(21b) Did you hear the bell?

(20a) では、今迄の時間の広がりの中で事態が生じたかどうか、現在の状態を左右するものとなっており、現時点でそれを確認している。それに対し (20b) では、ある過去時が念頭にあり、当該の時点で当該の行動が起きたかどうかまたは決断を下したのは相手かどうか、等が問われている。同じく (21a) は、現在に至る時間の流れを遡りつつ、その広がりの中で聞こえるという事態があったかどうか、(21b) はある時点を意識していてその時にベルが聞こえたかどうか、を尋ねている。いずれも現在完了の方は、現在において、いわばこれ迄の状況を現時点で決済する表現となっており、temporal profile は現時点の状況にある。過去形の方の temporal profile は勿論過去時にある。

では、どちらも現在の状況を profile する、単純現在形と現在完了形との違いは何かというと、当然の事ながら、それは現在完了形の場合は A の様な時間の広がり背景として profile の一部に持つが、(22) の様な単純現在形は持たないという点にあると言えるだろう。

(22) He has 500 yen.

単純現在形の文の SOA は、基本的に単に現在の状態を表す。勿論、状態というのは、ある継続的な出来事であり、広がりはあるが、現在時制はその様な SOA が現在当てはまっていることだけを表すので、現時点の事だけが profile される。即ち、(22) が表しているのは、[He-have-500yen] という内

容が、現時点で成り立っていることだけである。これは単純過去形が過去時点における事態の生起だけを profile するのと平行的である。一方、現在完了形の方は、現時点でこれ迄の時間の広がりを決済する表現なので、profile の一部として存在する p.p. で表される出来事が生起する時間の広がり背景に存在しなければならない。従って、(23a) に示される様に、単に現時点の状況だけを表す副詞とは、現在完了形は馴染まない。

(23a) *At this moment, I've gotten only 830 yen in my wallet.

尤も、単に現況を表すだけなら単純現在形を使えば良いのだから、これは当然と言えば当然ではある。逆に言えば、英語の歴史において単純形は、過去または現在時点の事態だけしか表さないという発達の仕方をし、そのギャップを埋め、現時点迄の経過における決済的意味合いを表す役割を担う表現の必要性が生じた為、現在完了形の意味が特殊化したとも言えるかもしれない。

逆に have got という形は、have の多様な意味の中でも、更にももとの所有状態に限った意味を表す様になり、意味的にも完了ではなく単純現在として慣習化しているので、(23b) は現在の状況を表し、全く自然である。

(23b) At this moment, I've got only 830 yen in my wallet.

(所有状態の意味)

また、発話者が、募金をしていて「今のところこれだけ集まった」という意味でなら、(23c) でも容認可能性はかなり上がる。

(23c) At this moment, I've gotten only 830 yen.

(the speaker's raising fund)

ただしそれでも、at this moment よりは up to now や so far 等の方が座りが良く、より適切な表現だと言えるだろう。例えば (24) が、犬が出産中で、今のところ5匹生まれたといった状況を表現するのにふさわしいのは、現在完了形というのが、これからも続く状況のこれ迄の経過にとりあえず現時点で

キリをつけて眺めた形だからだろう。

(24) At this moment, my dog has delivered 5 puppies.

(There could be more.)

さて次にBタイプの方にも目を向け、本稿案を適用すればこれらに関するいくつかの事実とも旨く符合することを見てみたい。まず、このBタイプは、*yesterday* 等の、参照点時点から切り離された特定の過去時を示す副詞句とも共起できる。(25a e) は大過去タイプとも呼べよう。その場合、p.p. の事態は背景化はされておらず、それ自体に焦点が当たっている。即ち、生起の時間的位置も *profile* の対象となっている為、ここに見られるタイプの副詞句の修飾する対象が存在する。

(25a) Jo didn't tell anybody how he had got into the house *yesterday*.

(25b) The ship carried a great deal of alcohol. She had left New York on *November 7*.

(25c) 'Back *in May, 1924*, he had asked her whether she would like to hear the news of the Loeb-Leopold case.' (A. Christie)

(25d) She thought dreamily how true the words were she had uttered *yesterday*.

(25e) Yesterday, we learned that Harry had joined the navy *in 1949*.

(25f) He seems to have completed the job *yesterday*.

(25g) I feel great, having completed the job *yesterday*.

(25h) You will have heard the news *last night*.

(25i) He {could/would/might/should/must} have phoned me *yesterday*.

単なる過去形との違いは、過去完了形の場合、主節または文脈や談話状況等を通して既に情報の送り手と受け手の間で或る過去時点が認識されていて、そこが参照点となりそこを経由して、それ以前に生起している p.p. の出来事が描

かれています、という点にある。(25g i) では、完了形部分が時制を伴わないので、主節の時制が参照点を指示している。(図3参照)

次の(26a)を(26a')の様に間接話法で伝える過去完了はAタイプの意味を持ち、その際 p.p. の事態生起位置を特定化する副詞とは馴染まない。加えて、(26b)は間接話法では過去形でも完了形でも構わないのにひきかえ、(26a')は過去完了形でなければ意味が変わってしまう。

(26a) I have had lunch.

(26a') He said that he had had lunch.

(26b) I ate three hamburgers for lunch.

(26b') He said that he {ate/had eaten} three hamburgers for lunch.

これに対し、Bタイプ、即ち大過去タイプの過去完了は、p.p. の事態生起が参照点より時間的に遡り、参照点とつながりを持つことが形式において保証されているという以外は、基本的に過去の事柄という意味で、過去形と同じ事になる。つまり、その様な位置関係が、その場の状況や文脈などから解っていさえすれば、ほぼ過去形と代替可能である。

逆の言い方をすれば、過去完了形には、参照点と上記の様な位置関係やつながりが形式で保証されている為、副詞に頼らずこの簡素な形式だけで、それを表現できるという利点もある。例えば(27a)の had gone through は、それだけで前文と密接なつながりを持ち、かつ前文の時間より前の出来事であることを伝え得る。

(27a) Jane could not find her passport. She had gone through all her private papers, but it was not among them. Where could it be?

(27a) の had gone through は、(27b) の様に went through と言い換えて構わない場合や、A B両者の意味が重なり合い、違いがあまり意識されない場合もある。

(27b) Jane could not find her passport. She went through all her private papers, but it was not among them. Where could it be?

だが、両者は無論全く同じという訳ではない。同じであれば、簡単な形に収斂し、過去完了の方は消滅してもおかしくない。両者が存在しているということは、それなりの意義や理由がある様に思われる。これについては次の様に考えられよう。即ち、単純過去形の出来事が並んでいれば、それらは生じた順に描かれていると解釈するのが一般的なので、2番目の文の事態は最初の文の後に起きたという解釈が可能である。よって (27b) の第2文は、このままでは第1文の状況を受けた後の行動と取る事も出来る。その様な解釈の可能性を消したければ、一つの方法は、(27b') の様に副詞によって事態の時間的生起位置を明確化することである。

(27b') Jane could not find her passport. She went through all her private papers *till late at night yesterday*. She tried to remember when she had last seen it this morning but it was not among them.

当然その意味では、(28) の様に過去完了形も使うことが出来る。この場合、出来事の時起時間も profile に入るからこそ、p.p. の生起位置を明確化する副詞が共起可能だとも言える。

(28) Jane could not find her passport. She had gone through all her private papers *till late at night yesterday*. She tried to remember when she had last seen it this morning but it was not among them. Where could it be?

繰り返しになるが、過去完了が過去形に代替可能なのは、それまでの状況や先行文脈を含む談話において、参照点が明示的である場合である。例えば、(27a) の様に第一文の状況に視点があり、参照点を定めることができたり、(29a) の様に文の意味から第一文より時間的に遡る事態であると明らかに了

解できる場合等である。

(29a) She threw away the present he gave her for Christmas.

(29b) We reached the hotel before the sun set.

Cf. Before the sun set, we had reached the hotel. (ミントン:1997)

(29a) の下線部の gave は勿論 had given でも構わないが、このままでも十分である。(29bCf.) は (29b) のすっきりした感じに比べ、くどい感じさえする。この様に、過去形で十分であれば、より簡潔な方が好まれても不自然ではない。一方、(27a) の様な過去完了形もまた、副詞や文脈上の了解事項などを要することなく、時間的位置関係や意味的結びつきを形式だけで保証する簡潔な表現方法として存在価値があるのである。

また、過去完了と過去形という二つの形が存在することにより、事態の背景・前景を描き分けこともできる。例えば (27b'') の第2文の p.p. の事態は、表現対象自体に特に違いがなくても、(27b') の went through に比べより背景化されていると感じられる。つまり、過去完了形は、Bタイプの意味とAタイプの意味の両方が混在し、特に区別が意識されることなく用いられることも多い。だが逆にそれは、両方の含みを持たせることが出来るということでもある。

以上本節では、英語の完了形のメカニズムについて本稿案を展開し、p.p. の生起時を意識するかしらないかによる2タイプを識別すれば、副詞との共起関係の一端および現在完了形と単純過去形・単純現在形、及び過去完了形との共通性と相違点を説明でき、また、完了形と時制の関係を含め、完了形をより正しく捉えうることを論じた。

4. 副詞との共起関係：Langacker 案と本稿案の比較

さて、本節では、本稿提案の出発点である Langacker 案と本稿案の共通点と相違点を明確化した上で、完了形と副詞との関係でこれまで問題とされてき

た更なる事例に当たりながら、本稿案を再検証する。概略、Langacker (1991) の完了形に関する案は、本稿案で言う2つのタイプを重ねた様なラフスケッチの格好となっている。これは本稿の出発点であると共に、完了形の主要要素を含んではいるが、細部においては未だ漠然とした部分がある。その為、Klein の疑問を始めとする、完了形と副詞句との共起関係を巡る様々な具体例に対処するには、いささか不十分である。

まず、Langacker 案と本稿案の共通点は、完了形が参照点構造の現れの一つであることと、have の意味にある。本稿はこの点では、Langacker (1991) 及び Langacker (1993) に示される考え方を取り入れている。have は基本としては、(30a) の様に「主語が何か (target) を物理的に手に持っているという意味」や (30b,c) の様に「精神的・社会的所有の意味」を持つが、より抽象的な (30d,e,f) を含め、他にも having a discussion といった動作を行う意等を包含し、様々な意味で使われる。

(30a) Watch out - he has a gun!

(30b) I have an electric drill, though I never use it.

(30c) They have a good income from judicious investments.

(30d) He has a lot of freckles.

(30e) We have a lot of skunks around here.

(30f) We have lots of rain here.

この、より抽象的の高い have の意味スキーマを、Langacker は「参照点から、その支配域の中の何からの関係を持つターゲットにメンタルコンタクトを行う」、reference point constructions の一つとして図4の様に描いている。Langacker によれば、(30a-f) においては主語が参照点であり、目的語が target である。そして、完了形の場合の have は、target がモノではなく atemporal relation であり p.p. の表す事態内容であるケースとして、図5に示される様な具合と

なっている。

図4：Langackerの have 一般のイメージモデル

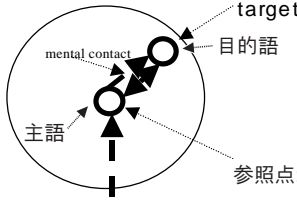


図5：助動詞の HAVE のイメージモデル

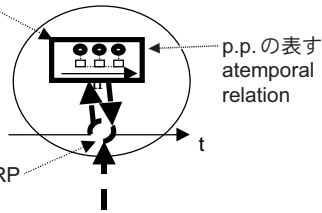


図6：Langackerの p.p. のイメージモデル

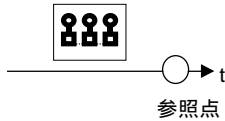
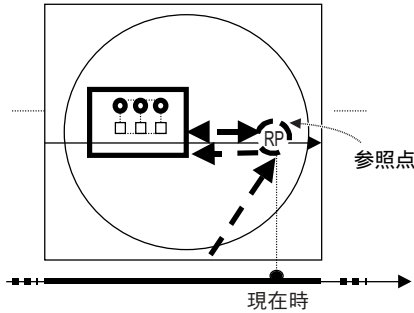


図7



更に図5の have と、図6に表現されている p.p. の事態が参照点時に先行しているイメージとが合体したものが、図7の Langacker の完了形のモデルである。図7における双方向の破線矢印は have の表す参照点と p.p. の関係を表現し、参照点から p.p. の事態への矢印はメンタルコンタクトを表している。そして参照点は現在完了の場合、現在時に対応していることが点線で示されている。

次に、Langacker 案と本稿案の相違点は、p.p. の意味機能の特色付けの仕方にある。先ず、Langacker 案では、p.p. の意味は「参照点より時間的に遡る」という側面のみが言及されているが、本稿案では、まずそこに「p.p. の事態の生起によって参照点の状態を特徴付ける機能」を加えている。

これは過去分詞の他の様々な用法にも共通する意味機能でもある。Shaer (1996) 等が指摘している様に、(31a f) の様な様々な過去分詞の用法には何らかの共通性が感じられる。

(31a) Charles likes fried eggs.

(31b) Charles likes his eggs fried.

(31c) With the eggs fried, he could make the coffee.

(31d) The eggs are fried, not scrambled.

(31e) The eggs were fried in butter.

(31f) Charles has fried the eggs.

Shaer 自身は、(31a f) の過去分詞の意味に見られる共通性を ‘change of state’ と指摘するのみで、それ以上の説明は難しいと述べている。しかし、‘change of state’ は認知文法でも明らかにされている様に、動詞全体が共通に持つ意味であって、過去分詞だけの意味ではない。それに対し、過去分詞の機能を「動詞の事態の生起によって何かを特徴付け、修飾すること」と捉えれば、(31a f) の過去分詞の意味の共通性を捉えることが出来る。(31a) においてはモノを、(31b e) では比重はそれぞれだがコトとモノの両面を、(31f) では、コト (状態) を特徴付けていると考えることができる。同時に、p.p. の意味機能を本稿の様に捉えれば、結局 p.p. の事態が参照点時点以前に既に起きていることも含むことになる。

完了形の p.p. のこの特徴付け機能は、p.p. 全般の意味の一部というだけでなく、完了形のふるまいにも関わってくる。というのも何かを特徴づけるという

ことは、その事態に何らかのキリをつけ、ひとまとまりのもとして捉えているということでもある。ある事態をひとくりにして見て、初めてその影響というものが別に考えられるからである。従って本稿案では、例えば、(32a) が現在迄の継続状態を表すには、期間を表す副詞句が明示的にあるか、あるいは話者と聴者の間で何らかの期間が理解されていなければならない理由も説明できる。

(32a) He has lived here.

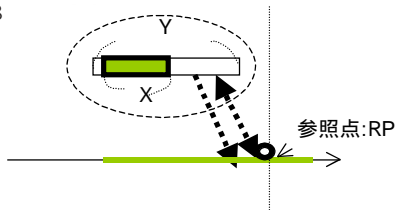
(32b) He has live here for two years.

即ち、(32a) が、これだけでは通常「彼は昔ここに住んだことがある」の意味に解釈されるのは、この live の指す事態が、ひと区切りついたもの、即ち既に生起しかつ現在時以前に終了していなければならないからである。基本的に live の様な状態 (imperfective な事態) 自体には本来始点や終点は意識されないが、(32a) では、境界が設けられた状態がイメージされ、それ自体は現在は終了している。従って、(32a) がこれまでの継続的状态を表す為には (32b) の for 2 years の様な期間が必要なのは、p.p. の表す事態が継続的である場合、今の時点迄等何らかの形で期間を区切りキリをつけなければ、その結果や影響に言及することが論理的にできないからである。それはある会社の経営状態を把握する一方法として、ある時点でしめて決算するのと同じであろう。我々の周りで起きている、ある時から現在迄に起きた事柄や、現在続行中の事項を把握するには、現在時点の状況だけを捉えるのではなく、それ迄の様々な事柄のある時点で決済した形で捉えた方がよい場合がある。それがこれ迄述べてきた完了形の A の機能ではないかと思われる。

無論、(32b) は for 2 years 等が付加されても「彼は昔 2 年間ここに住んだことがある」という意味にも取れる。これは、図 2 を再出した図 8 の X 部分の期間に当てはめることができるからである。(32b) だけでは、昔のある 2 年間

か今迄の2年間かは曖昧である。それを明確に今迄の2年間にしたければ、例えば *for these 2 years* 等とする必要がある。そうすれば、p.p.の継続期間をYの広がり右側の枠一杯まで伸ばすことを明示できる。

図 8



ここで大切なことは、p.p.の表す図中のXやYの広がりがこの様に参照点時以前迄にキリがついていなければならないことである。それ故、例えばある人物について、今回が2回目の来日で未だ日本に滞在中の場合には、(33a)の様には言えない。彼が未だ日本を発っていないければ、2回目の *be in Japan* が未だ終わっていないからである。その様な場合には、例えば (33b,c) の様な表現とでもするしかない。

(33a) He has been to Japan *twice*. (既に日本を発っている場合はOK)

(33b) He has been here *once before*.

(33c) This is his second visit.

上記の様に考えれば、(34a)の奇妙さも説明することが出来る。

(34a) *Chris has been dead.

(34b) He has been a student.

(34c) Chris has been dead *for 2 years*.

(34d) Chris is dead.

(34b,c)とは違い、(34a)が異様なのは、通常一度死んだ者は生き返らないので、虚構の世界の話でない限り死んだ状態にキリをつける理解ができないからである。即ち(34a)はこのままでは「彼は死んだことがある」等という、まる

で死亡状態が終わっているかの様な意味を持つことになる。それ迄の継続状態がこれからも続く場合には、(34d) を使えばよく、完了形という、より複雑な形にする必要もない。単純形では表現できないから複合構造が必要となったからである。勿論、(34b) の様に、これ迄学生だったことだけについての表現として理解できたり、(34c) の様に期間を示す要素があり、死んだ状態に2年間というキリをつけたもの自体が終わっている解釈ができれば、何ら問題はない。即ち (34c) は「彼が2年間死亡状態だったことによって特徴づけられる状態が現在存在する」ことを表している。だから、死んで2年経つという解釈もあれば、生き返りが可能な世界では以前2年間死亡状態だったことがあるという意味にもなり得るという訳である。

次の (35a) も同様で、ドアを付け替える為に今はずしていたり、魔法やCGでドアの材質を色々変えてみたりする状況ではおかしくないが、それ迄もこれからも同じドアという意味であれば非文である。

(35a) *The door has been wooden. (同じドアを指して言っている場合)

(35b) The door has been open.

それに対し、(35b) がおかしくないのは、これから変わり得るからである。The door is open との意味機能役割の分担も明らかである。

更に、Klein が自身の説では説明できないと述べる次の事例も、ここまで述べてきたことで自ずと明らかとなる。

(36 = 8a) *For (these) two years, he has been dead.

(37 = 8b) *Recently, Chris has arrived. (Cf. Chris has recently arrived.)

勿論、これらの場合、期間を表す副詞が前置され文副詞となっていることから来る要因も併せて考慮しなければならない。即ち、先にキリをつけた期間が強調され、そこだけが際だつ何らかの意味合いが必要となるからである。例えば (36) が期間があるのにダメなのは「この期間だけ死んでいた」といった、その

後は生き返るような意味となるのである。生き返ることが可能な世界であればこの文もまた可能であり、通常の場合でも *dead* の様な可塑性のないものではなく、これからは異なり得る (36') の様なものであれば可能となる。

(36') *For (these) two years, he has been a student.*

(37) が容認不可なのも、Cf. では参照点の状態を特徴付ける役目が主で、背後に回っている p.p. の事態の生起位置が、*recently* の前置により強調され全面に引き出されてしまったからである。(37') の様に主動詞の *have* の時制の位置、即ち参照点のある発話時の状態を修飾し得る副詞であれば、それでも文副詞となり得るが、(37'') が示す様に、*recently* は現在の状況を修飾することはできない。

(37') *Now, they all have arrived.*

(37'') **They are here recently.* Cf. *Chris arrived recently.*

同様に、習慣 (の一種、例えば趣味や職業として) 等の現在迄の継続を表す場合にも、(38a) の様に期間の表現が必要で、なければ (38b) の様に経験等の意味になることや、現在完了進行形の場合は期間がなくても (38c) の様に、継続の意味になることも説明できる。

(38a) *He has drawn for years.*

(38b) *He has drawn.*

(38c) *He has been drawing.*

(38d) *He has been drawing for years.*

(38e) *He has been eating the cake.*

即ち、現在完了進行形は、現在迄の時間の広がりや背後に持つ現在完了に、現在活動途中にあることを表す進行形の意味が重なり、その意味でもともと継続を表すからである。(38a) と (38d) は継続性が共通要素であるが、(38a) はこれ迄数年趣味や職業として絵を描いてきたことで彼のある属性を表現しており、

(38d) はこれ迄その様な活動をして来て今でも活動していることにより重点がある。

さて、最後に残るのは、(39a) の奇妙さをどう処理するかである。「完了形が参照点迄の継続的事態を表す (profile する)」という Langacker の説明だけでは、これも困難である。

(39a = 3) *He has broken his leg *for 2 months*.

(39b) He has broken his leg *twice in these 2 months*.

仮に「完了形が参照点迄の継続状態を profile する」のであれば、(39a) の2ヶ月間は、骨折した後の状態の参照点迄の継続期間、或いは broken とつながりを持つ何らかの時間の広がりやを修飾していても良さそうなものだからである。

しかし、(39a) は極めて異様な文であり、その奇妙さは、直観的には2ヶ月が broken を修飾できないことに起因している様に感じられる。完了形の意味説明は、この直感とも整合的でなければならぬと思われる。本稿案では、以下の様に説明できる。for は出来事の生起継続期間を表すが、骨折という出来事は、通常2ヶ月かけて起きる出来事ではないので「2ヶ月間」という語句の修飾対象とはならない。また、図8のY部分の時間の広がりや単にその出来事をその範囲内で生じたものとして眺めるスコープであるので、(39b) の様に、in these 2 months 等であれば、このスコープと合致し、このスコープ内で2度起きたこととなりうるが、for では合わない。profile の対象となっている部分で残っているのは、マルで囲まれた現在時点であるが、これは基本的に点である。というのも、或時間の広がりやにおいて生じた過去分詞で表された出来事がつながりを持つ状態は背景にはあるが、この文の profile は時制のある現在時という参照点であり、この文はその状態が参照点において当てはまっていることを表すだけである。従って、これも期間の副詞の修飾対象とはなり得ない。即ち、副詞が修飾できる対象がここにはどこにも存在しないから (39a) は容認

されないのである。この様に、この (39a) の例文からは、現在完了形の意味や副詞との関係を説明するには、完了という表現形と時制との関係や文が現在完了形として実現するメカニズムが正しく捉えられる必要があることも解る。

以上この節では本稿で捉える現在完了形の profile のあり方によって副詞句との共起現象を説明できることを論じた。

5. 結 語

本稿では、英語の完了形に関わる概念を3つの観点から識別し、完了形の位置づけや意味機能の明確化を図り、それによって副詞との共起関係を説明できる事を論じた。まず、完了形の意味機能を、過去分詞の事態の生起時が [背景化され、過去分詞が参照点の状態を特徴付けることに特化したA] と [前景化されたまま、意味の焦点となっているB] の2つのタイプに分けることにより、Klein (1992) の謎を解決した。更に、完了形 (現在及び過去) の文を完了形の意味内容と時制機能とに分け、完了形の意味内容が、時制の指示する時点で成立していることを指す事、及び、完了形の形式を have と過去分詞に分けた場合の過去分詞の意味機能として、temporal anteriority to RP というだけでなく、参照点の状態を特徴付ける機能もある事を指摘した。例えば、現在完了形の文は、過去分詞の事態生起に特徴付けられた状態が参照点である現在時点において成り立っている事を表すことになる。その上で、本案によりこれ迄問題となってきた副詞との整合性が説明できることを、いくつかの事例を通して論じた。同時に、単純現在形と単純過去形との違いも示せたと考えている。

参考文献

Harder, Peter (1995) *Functional Semantics: A Theory of Meaning, Structure and Tense on English*. Mouton de Gruyter.

- 川瀬義清 (1999) “英語の完了形 — 認知的観点から — ” 『英語英文学論集』
第40巻 第1・2合併号 : 115 136.
- Klein, Wolfgang (1992) “The Present Perfect Puzzle,” *Language*. 68: 525
552.
- McCoard, Robert W. (1978) *The English Perfect: Tense-Choice and
Pragmatic Inferences*. North Holland.
- T.D.ミントン (1997) 「ここがおかしい日本人の英語」 研究社
- Langacker, R.W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar, vol.2*.
Stanford.
- Langacker, R.W. (1993) “Reference-Point Constructions,” *Cognitive
Linguistics*. 4 1: 1 38.
- Mittwoch, Anita (1988) “Aspects of English Aspect: On the Interaction
of Perfect, Progressive and Durational Phrases,” *Linguistics and
Philosophy*. 11: 203 254.
- Patrick, Betty and Kirk (2001) *English in Context, Phrasal Verbs*.
Learners Publishing References.
- Shaer, Benjamin M. (1996) *Making Sense of Tense: Tense Time Reference,
and Linking Theory*. Ph.D. Dissertation McGill University, Montreal.
- Vlach, Frank (1993) “Temporal Adverbials, Tenses and the Perfect,”
Linguistics and Philosophy. 16: 231 293.